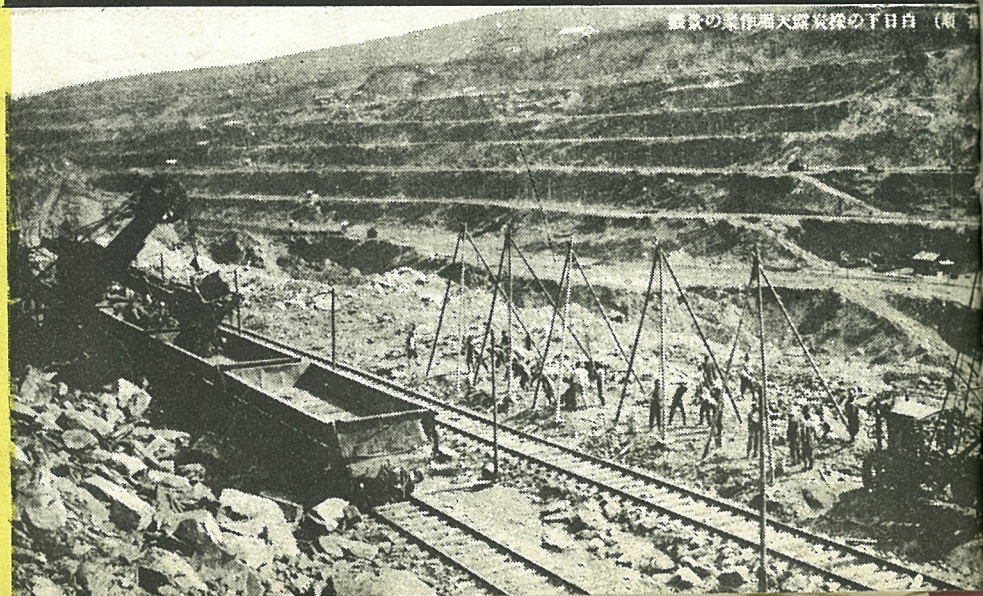
8.6.19

滿洲建築協會雜誌
第十三卷・第四號

新撫順の市街計畫と其の建築

滿洲建築協會發行



撫順の露天採炭場の下日向（頁）

ホロータイル

フエースブリツク

礦滓カツト

鋪道煉瓦

スクラツチタイル

カツトタイル

機械製煉瓦

普通煉瓦

專賣特許 鐵筋煉瓦

營口煉瓦製造所

大連工場　大連市管內西山會三春柳一
電話九〇九七番

周水工場　大連市管內周水屯周家屯

大連出張所　大連市越後町二八
電話三九〇五番

馬車配給所　大連市財神街三
電話七七五八番

編輯辭

□當編輯部に於て此の特輯を思ひ立つたのは(一)特殊の事由により從來の都市を破壞して全く白紙的原野に新しい市街を移轉したといふ空前の事業たる事、(二)土木、建築、設備等、都市建設に關する諸要素の綜合たる都市計畫の立場から見て、撫順のそれは少くとも滿洲に於ける幾つかの新しい都市建設に於て與へられた凡ゆる經驗の上に創造されたものだといふ事、(三)舊撫順即ち千金寨の市街は所謂大露天掘の爲に日に〳〵其の地上建設物が破壞され、近い將來に於て全く往時の面影を止めざるに到るべき運命にある事、(四)過去に於ける都市としての舊撫順は勿論、新市街の計畫や其の實施狀況も亦、日を經るに從つて此れを正確適切に記錄することが困難になつて行くこと、即ち此の計畫の當初からその建設、その移轉完了の現在迄、局に當つた主要なる人々がその儘其の立場にある間に之れを記錄として整理しておくのでなければ人の代ると同時にそれが不可能的になつて行くこと等の理由によるものである。

□新撫順の建設問題の起つた當初から、其の市街計畫の立案、而して其の實施、移轉完了の現在に至るまで其の局に當つた主要なる人々といふのは主として最近まで當地の工事事務所建築主任たりし原正五郎氏竝に現在の主任松江昇氏及其の他二三の人々を指すものであつた。此等の人々は何れも此の企畫に對し衷心より贊同を與へられたるのみならず原、松江、西原の三氏は自ら執筆の勞を取つて此の計圖の實現を助けられたのは眞に感謝に堪えざるところである。

□編輯部當初の計畫としては、勿論どこまでも建築といふ立場からの計畫ではあつたが、同時に或る程度迄で市街計

畫の基調となるべき諸要項出來得る限り之を取入れて行く事によつて、此の特輯の完璧を期し度いと希つたのであるが、實際當つて見ると、直接建築に關係した方面は原、松江の兩氏共に其の專門であり又その當事者であるだけに、其の資料は最も適切に整へられる事を疑はなかつたのであるが、其の他の方面は適當な資料が無かつたり、新に寄稿を依頼する因緣に薄かつたり、間に合せの資料では其の程度や、形式が其儘蒐錄至難のものゝみで、大部分斷念せざるを得なかつたのは是非もなき事ではあつた。

□記事的紹介よりは寧ろ圖版紹介に重きを置くことが當初からの編輯上の意圖であつたので、寫眞撮影の點に於ては新舊市街共凡そ希望を滿たし得たのであるが、圖面の點に至つては青寫眞は製版至難であり、原圖は何れも貴重なものゝみで、此の特輯の爲には缺くべからざる重要な意義を有するものでありながら、絶對社外持出不可のものもあり、又多くの原圖が何れも汚損してゐて製版至難であり、さりとて此を一々淨寫するには勞力と時間が許さぬといふ關係で、割愛に割愛、遂此の程度に止めざるを得なかつた次第である。

□右の次第で、其の內容に於て若干の不滿足がないではないが、之れ以上のものを編纂するには最早到底力と時と而して金との點に於て不可能な場合であつたことを表白しなければならぬ。

□炭礦工事事務所煖房主任の西原氏が多忙の中から、特に本特輯の爲に新撫順市街に於ける煖房設備の特異點を紹介せられたのは其の類例の稀有なるだけに極めて貴重の資料たることを信じ、爰に厚く感謝の意を表せざるを得ない。

□此の編輯辭を終るに當り現炭礦長久保孚氏竝に當地の實業協會が此の企畫を贊同し多大の援助を與へられた事は記して深く感謝の意を表する次第である。

昭和八年五月十日　　石田生

序

古代に於ける都市の建設は、多く王者の宮殿を中心として營まれ、封建の時代に入つては、諸侯の城塞を基心として建設された、前者は卽ち一國の首都であり、後者は所謂城下ともいふべき都市である。此の種の都市は決して歐洲のみではなく、日本、支那に於ても何千年の昔から當時の識者達人によつて夫々其の時代の要求に適合したものが計畫されて來たのである。唯今日に於いては多くは極めて簡單なる文獻や、遺跡によつて僅かに其の事實を推定し得るに過ぎざるもので、到底現代の如き科學的の正確さを以つて之を知ることは出來ないが、時には相當行屆いた記錄の傳はるものもあつて、往時の計畫的技術を窺知し得られるのは悅ばしい事である。

日本に於ける各都市は殆んど室町以後の封建時代に於て營まれたもの、或は明治の初期から商業地としての自然膨脹によりて形成せられたるものを基とし、更に時代の進步に伴ひ之を擴張改造して發達し來つたもので、一面には現代的都市として見らるゝものがあり、又一面に於ては昔ながらの捨て難い俤も見出されるのであるが、全體的には未だに舊套を脫し得ないのが一般である。從つて、現代の科學的技術によつて最初から根本的に計畫された都市は、日本の如き歷史の國柄にあつては到底其の例を見出すことの出來ないのが當然である。

然るに日淸戰役後の臺灣や日露戰役後の滿洲に對する我が國の積極的進出は、正に日本の都市觀念に一進紀元を劃し、其處に都市創作を實試する機會が惠まれたのである。之は吾々建築人は勿論、凡そ現代都市構成に關係を有する凡ゆる技術者をして、全く自由に其の抱負を實現する機會が與へられたのであつて、之によつて斯界の發達を促進したことは甚大なるものがあつた。

滿洲に於ける都市建設を見るに、旅大の二都市は戰前露國人によつて計畫されたところを踏襲し來つたものであるが、奉天、長春、鞍山、安東、撫順(千金寨市街)等何れも白紙的の原野に對つて其の計畫を立案實施せるものであつて、維新以來